

平成28年度「特別支援教育に関する実践研究充実事業
(特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究)」報告書

団体名	筑波大学
研究開始年度	平成28年度

I 概要

1 指定校の一覧

設置者	学校種	障害種	学校名（ふりがなを付すこと）
国立	特別支援学校	知的障害	つくばだいがくふぞくおおつかとくべつしえんがっこう 筑波大学附属大塚特別支援学校

2 研究テーマ

知的障害特別支援学校における一人一人の教育的ニーズに基づくカリキュラム運用プロセスの実証的検証

3 研究の概要

「個別教育計画」、「学習内容表」、「大塚モデル『指導計画集』」の3つのツールを教育課程の中心に位置づけ、授業づくりに活用するためのより有効的なプロセスを検証した。「個別教育計画」について、幼児児童生徒一人一人の「願い」を汲み取り、教育計画に反映させた。具体的には「願い」の実現に向けて、本人、保護者、教員、関係者の間で、「個のニーズ（目標/課題と必要な支援）」を継続的に確認し、共有することを目的とした「個別教育計画（プロフィール）」の枠組みを提案した。その中で本人や保護者の「願い」、「個別教育計画上の重点目標」「学習や生活に必要な支援（合理的配慮）」を明記し、本人を中心とした「個のニーズ」を計画上でも共有し、評価、改善をしながら引き継ぐ取り組みを行った。また「個別教育計画」から導き出される「個のニーズ」と、「学習内容表」から導き出される「集団のニーズ」の双方から単元目標を設定し、授業づくりを行うことで、一人一人の「願い」に基づく授業実践を行った。またそれらの授業について、指導計画を中心とした継続的な授業評価と授業改善を行い、幼児児童生徒が「何を学んだか」を検証した。

4 研究の成果

「個別教育計画（プロフィール）」の作成と運用を通して、本人の「願い」や保護者の「願い」、教員の「願い」に焦点を当て、「個別教育計画」の重点目標として具体化する実践が蓄積されてきた。また外部専門家を講師に招き教員研修会を行う中で、本研究における基礎的環境整備と合理的配慮のとらえ方について整理がなされてきた。授業づくり研究については、本人の「願い」や「意思」に着目して実践を重ねる中で、「願いや意思を表明する力」を育むことの重要性や、関連する教育内容、

方法の系統性や発展性が議論された。特に各部の授業実践ならびに研究協議を通して、3つのツールを活用した授業づくりが、幼児児童生徒の「人と共に様々な活動に参加する力」（例えば情動共有、自己の育ち、他者との関係性、仲間意識、役割といった人間関係形成の力）の育成に寄与していることが示された。また授業の評価と改善について、研究授業の事前提案や授業評価シートの再編成により、協議の観点がより明確化され、授業改善のための授業評価として内容や方法を深めることができた。特に単元評価を学級、学部、全校で行う中で、授業づくりのプロセスが校内で再確認され、授業評価、授業改善に関する各部の独自性や部間の共通性が整理された。

5 課題と今後の方策

「個別教育計画（プロフィール）」に関する実践については、支援プロセスとして継続的に積み重ね、丁寧に整理をすることで、幼児児童生徒一人一人の「願い」を「個のニーズ」として教育計画に反映する運用プロセスがより明らかになると考える。一方、書式や運用面の課題として、現場実習等、校外で活用する資料としての使いづらさが挙げられる。次年度は、データベース化等を視野に入れながら、用途に応じて項目の改編ができる仕組みを整えることが必要と考える。また授業づくりについては、「個別教育計画（プロフィール）」の実践と共に議論がなされた、「願いや意思を表明する力」等の新たな「つきたい力」の育成に向けた授業研究を行うことが今後の展望として挙げられた。今年度取り組んだ、カリキュラム運用プロセスを踏襲しながら、幼稚部から高等部までの各段階での「願いや意思を表明する力」に関わる学習内容を挙げ（Plan）、具体的に授業の中に取り入れて（Do）、幼児児童生徒の学びとして評価をし（Check）、次の授業改善や計画改善に活かす（Action）ことによる、実践的な検証を継続して行う必要があると考える。